

サンプル

①従順。ペットの発情生活

「ご主人様」

「臯月?! どうした」

突然呼びかけたからだろう。折坂は椅子が倒れるのではないかと思うほどの勢いで振り返った。ガシャン! と変な音がしたけれど、キーボードは大丈夫だっただろうか。

「あの、すみません、ちょっと出かけてきてもいいですか」

「……どうして?」

普段話さない臯月が自ら声を掛け、服を着て外へ出たいと言う——それが折坂に不安を与えてしまったようだった。

「あの、ちょっと、その、二時間くらいで帰ってきます」

どこへ何をしに行くのか。どうして一人で行こうとしているのか。折坂は全てが気になっているだろう。けれど言うわけにはいかなかった。だって、目当ては折坂の誕生日プレゼントだから。

折坂はきつと、臯月が誕生日を知っていることを知らない。臯月自身、犬としての生活が快適すぎて人間のイベントである誕生日なんて忘れていたくらいなのだ。

でもそれを知ったのは、本当に偶然だった。

きつと記事を確認していたのだろう。折坂が置きっぱなしにしていた何かの原稿。そのプロフィールのところに誕生日が載っていたのだ。

それを見て、初めて知った。それから早数か月。何にしようか、と毎日考えたけれど、どうしても何も浮かばなかった。でもやはり何かあげたい。形に残るものを渡したい。

でも生憎折坂はお金を持っているから不自由はしてなさそうだ。それでも幸い高級志向でもないようなので、臯月の貯金で買えるものでも喜んでもらえるだろう。だから買い物に行こうと決めたのだ。

「あの、それと、すみません、僕の通帳、いいですか」

「どこへ行くんだ」

折坂の声が陰しい。

「え、と……どこ、というか……」

はつきり言って行先は決まっていらない。駅ビルとか、商業施設を回ってプレゼントを見つけようと思ったのだ。

「何をしに行く?」

折坂は追及を緩める気はないようだった。声に鋭さが増す。

「……その、買い物に」

「何がほしいんだ」

「いえ、その……」

思わずたじろぐ。犬として生活をしているとき、折坂はこんな声を出さない。こんな風にきつい目で臯

月を見たりしない。

②カルーアミルク

篠崎誕生日前日の夜――。

「あの、今夜って忙しいですか？」

夕食後のお茶を飲んでいるときだった。唐突に訊かれた。

「今夜？ 普段通りだが観たい番組でもあるのか？」

今年の夏はホラー番組をいくつか一緒に観たけれど、そういえば最近は何も一緒に観ていなかったな、と気付く。休日はゆっくり過ぎすことも多いけれど、夜はテレビを観るよりも身体を触れ合わせている方が多かった。

「いえ、そういうわけじゃないんですけど……」

けど、一体何なのだろう。何かあったのだろうか。最近調理中でもぼーっとしていたり、悩んだような表情を見せることがあった。けれど諒も子供ではないし、困ったことがあったら相談してもらえる関係を築けていると思いつとしておいた。

でも、もし言いたくても言えない悩みを抱えていたとしたら。篠崎から声を掛けることを待っていたのだとしたら。自分は間違いを犯したかもしれない、と焦る。

「どうした、何かあったか？」

それでも悩んでいると気付いていたことはまだ伝わらない方がいいかもしれないと思い、声が鋭くならないように意識して問うた。

『何か』が起きてからでは遅いのには。

「いえ……あの、急ぎの仕事じゃなければちよつと時間もらってもいいですか？ 二十時半頃からなんですけど」

二十時半頃から、という言い回しが気になった。どうして時間の指定が必要なのだろうか。相談なら早い方がいいだろうに。それとも深夜の番組を観たいのだろうか。夜中にホラー映画を放送していることもある。

しかし普段寝るより遅い時間から、というのは解せなかった。それなら録画しておけばいい。それに今日はまだ木曜日で明日は仕事のはずだ。一日くらい睡眠不足でも明日で週末と思えば切り抜けられるかもしれないが、諒の性格を考えると腑に落ちなかった。一体何があるのだろうか。しかし言いにくいことなかもかもしれない。普段の諒なら遠回しな言い方はしないだろうから。それに篠崎が仕事と分かっている時間が欲しいというからには大きな理由があるはずだった。時間はいくらでも作る。しかし内容が気になった。

「……わかった、それまでに終わらせておくよ」

じつと見ているもそれ以上説明をする気配がなかったので、渋々了承した。もちろん渋々であることは伝わらないように、だ。それでも気がかりはあった。

「しかし寝る時間は大丈夫なのか？」

「はい、大丈夫です」

なら、それほど時間のかからない用事ということか。しかし二十三時半という中途半端な時間も気になる。しかし諒はきつと言わないだろう。

③いけない大人たち 義之×奈央

「奈央、誕生日おめでとう！」

「奈央さんおめでとうございます！」

野太い男たちの明るい声が部屋中に響く。

普段食事を摂る広い座敷には大きなテーブルがどかんと置かれ、その上にはところ狭しと奈央の好物が並んでいる。そして一番目を引くのはその中央に置かれた大きなバースデーケーキだ。

「誕生日？」

不思議そうな声。その声の持ち主は可愛く首を傾げていた。

(まさか誕生日を知らないのか?)

自分の年齢を知っていたから誕生日も当然知っているものと思っていた。しかし奈央の成長過程を考えれば誕生日を知らなくても不思議ではない。

「奈央が生まれた日だよ」

やはり奈央は首を更に傾げるだけだった。

(あまり詳しく言っても傷付けるだけか)

「今日は奈央が生まれてきてくれた日だから、みんなでお祝いをするんだ」

「お祝い？」

本もなく成長したからか、奈央は語彙も乏しい。それは分かっていたことだけれど、こうして祝い事すら知らないと思うと切なくなつた。

皆思うところは同じなのだろう。あんなに楽しそうにしていた組員たちの表情も曇りつつある。けれどそれを悟らせてはいけない。とにかく楽しくて、嬉しくて、喜ばしい日なのだとすることを教えてやりたかった。

「そう、ケーキやごちそうを食べるんだ」

「ケーキ！」

奈央の溢れんばかりの笑顔に、組員の一人が大きなバースデーケーキを正面に持ってきた。テーブルの真ん中にあつたものだ。奈央に近くで見せてやろうと思つたのだろう。

「奈央さん、これ、読めますか」

「な……な、お、く、ん、お、た、ん、じ、よ、う、び、お、め、で、と、う」

ひらがなはカルタ遊びで覚えた。けれどまだ絵本のように文字が続くものは読んでいない。それでも一文字一文字ゆっくり丁寧に読めていた。誕生の「よ」が「よ」となってしまうのは追々教えてやるしかないが、発音はできるのだし、覚えもいからきつとすぐに読めるようになるだろう。

「わ！ 奈央さん、上手に読めましたね！」

「上手！」

皆に大げさなほどに褒められ奈央は「おめでとう」と言われたときよりも更に嬉しそうな顔を見せる。やはりおめでとうと言われる意味が分かっているのだ。まさか誕生日を知らないとは思っていないなかったけれど、そうと分かったからには明日にでも誕生日の絵本を買ってやろうと心に決める。でもまずは今日という日を盛大に——今までの分も——祝わなければならない。

④包帯と傷薬

「痛い……」

「ああ、血が固まってる……」

毎朝の傷の確認の時間。ベッドに座って足を大きく広げ、ペニスと陰囊がしっかりと見えるようにする。そして至近距離から診てもらおうのだ。

「痛い……彰さん、痛いよ」

昨夜近藤に、ペニスと陰囊を無数の針で刺されたばかりだ。痛い。きつとまだ血も滲んでいるだろう。

「うん……ガーゼに血がついてくっついちゃったみたい……無理に剥がすと痛いから、シャワーで一度柔らかにしようね」

日向は抱き上げて浴室まで運んでくれた。寝る前は鎮痛剤を飲んだから眠れたけれど、すでにその効果は切れて身体が揺れる度に鈍痛をもたらしていた。

「お湯怖い……」

「うん……でも剥がさないと」

マットに下ろされてもまだ怖くて日向の首から腕をほどくことができない。怖くて怖くてぎゅっと大人の身体に縋り付く。

「可愛い……怖いね。でも一緒にいるからね」

日向がシャワーからお湯を出した。怖い。だって昨日刺されたばかりなのだ。滲みるに決まっている。

「優輝くん、終わったらケーキ食べようか」

まだ心が決まらないからか、日向はすぐにお湯を止めてくれた。それに優しい提案。

「え？」

「お誕生日でしょう」

「あ……」

そういえばそうだったかもしれない。

「忘れてた？」

「だって……」

昨日近藤に会うことは数日前に決まっただけけれど、決まっただけからはずっと恐怖と緊張感に苛まれていた。誕生日なんかより「あと何日で近藤」というイメージばかりになってしまっていたのだ。

「せっかくの誕生日なのに、おちんちん痛くしてごめんね」

「……あの、彰さん今日はお仕事は？」

ケーキを食べる時間なんてあるのだろうか。というか、冷蔵庫にそんなものあった記憶がない。

「え？ どうして優輝くんの誕生日に仕事をするの？」
「一体何を言っているの？ と言わんばかりの声だった。その様子に少しだけ心が和む。
「だって、お仕事かなって……」
「そんなことあるわけないよ。一緒にいるよ」
「なら、その、おちんちんの手当が終わったらセックスしてくれる……？」
「むもっららよ」

約2万文字です。
作者の誕生日なので……！

2019.11